

独立行政法人放射線医学総合研究所に係る業務の実績に関する評価（平成 13 年度）

中期目標の項目	評価項目	放医研部会としての所見
全体評価		
○ 事業活動		独立行政法人化して初年度という組織改革の渦中であって、所定の目標はほぼ達成されている。中期計画に良く従って活動しており、放医研全体として順調に進捗していると評価できる。
○ 業務運営	理事長の主導性	理事長の強いリーダーシップの下、独立行政法人制度の特長を活かして、積極的に構造改革と所員の意識改革に取り組んでいる。特に、理事長調整費を活用して基礎的・萌芽的研究を実施する体制を整えたことは高く評価される。
	効率性	理事会議、役員懇談会、若手戦略会議、運営連絡会議などを新たに設置し、効率的な運営体制の構築に努めている。ただし、現在示されている情報だけでは、費用対効果等の客観的な評価は難しい。
	透明性	内部研究評価や基礎的・萌芽的研究の公募等が適正に実施されており、透明性を高めるための努力が払われている。課題として、何か問題が起きたときに、情報の透明性を保ちつつ組織として迅速に対応できる危機管理体制を作っておくことが必要。
	人事の適正	若手育成型任期付き採用や交流人事を推進しており、人材を適所に配置するための努力が認められる。
○ その他		独立行政法人制度に対する幹部職員の意識は高く、制度の特長を活かして多方面の改革に意欲を持って取り組んでいると思われる。一方、一般研究者や研究補助者等の職員の意識については、今回は正確に把握できなかった。早急に、独法化に関する全職員の意見を聴取し、その結果を今後の改革に役立てられたい。
○ 総合評価		放医研は、平成 13 年度実績においてほとんどの項目で年度計画を達成しており、独立行政法人として順調なスタートを切ったと考えられる。また、理事長はじめ幹部職員が独立行政法人制度の理念をよく理解し、その特長を活かす改革に意欲的に取り組んでいる。特に、諸改革における理事長の意欲とリーダーシップは高く評価できる。次年度以降の課題として、意識調査の実施等により全職員の意識改革を促すこと、より積極的に競争的外部資金の獲得に取り組むこと、及び組織としての危機管理体制を充実させることを望みたい。

中期目標の項目	評価項目	部会による4段階評価	放医研部会としての所見
項目評価			
・業務の質の向上に関する事項			
1．重点研究開発領域	中期計画の進捗状況		
	(1) 放射線先端医療研究		
	重粒子線がん治療臨床試験	S	年度計画に沿った成果が十分に得られている。高度先進医療の承認申請を行える状況になったことは高く評価される。
	高度画像診断技術の研究開発	A	年度計画に沿って着実に進んでおり、研究レベルも高い。ただし、専従研究者が少なく、外部の研究者や企業の協力に大きく依存している点が懸念される。
	(2) 放射線感受性遺伝子研究	B	試料収集に時間を要している。正常組織の放射線感受性の判定を急ぐ必要がある。
	(3) 放射線人体影響研究		
	低線量放射線の生体影響に関する総合的研究	B	研究が多岐にわたっているため、成果が散漫にならないよう、総括的な目標を改めて設定して研究の方向性を明確にする必要がある。
	宇宙放射線による生体影響と防護に関する研究	A	年度計画に沿って進められている。発表論文も多い。
	(4) 放射線障害研究		
	緊急被ばく医療に関する研究	B	年度計画と比較して遅れている。コンサルテーション・マニュアルの早急な作成を希望する。
2．基盤的研究	中期計画の進捗状況		
	(1) 環境系基盤研究	A	ラドンに関する研究の一部に実験施設整備の遅延による遅れが見られるが、他は年度計画を十分達成しており、全体として計画通り進んでいると考えられる。
	(2) 生物系基盤研究	A	全体として計画通り進んでいる。放射線影響研究用実験動物の開発及びプルトニウム化合物の内部被ばくによる発がんに関する研究については、論文発表を活発にされたい。
	(3) 重粒子線治療に関する基盤研究	A	年度計画通りに進んでいる。
	(4) 画像診断に関する基盤的研究	A	年度計画通りに進んでいる。研究レベルも高い。
	(5) 医学利用放射線による患者・医療従事者の線量評価及び防護に関する研究	A	年度計画通りに進んでいる。
	(6) 脳機能研究	A	年度計画通りに進んでいる。研究レベルも高い。
	(7) 原子力基盤技術総合的研究	B	ラドンの健康影響に関する研究に遅れが見られる。専従研究者がわずかであることが懸念される。
	(8) 国際共同研究	A	国際貢献として、期待以上の成果を挙げている。

中期目標の項目	評価項目	部会による4段階評価	放医研部会としての所見
3．基礎的・萌芽的研究	研究の実施状況	A	研究者個人の能力を発揮できる機会を増やしたことは高く評価される。
4．競争的研究	外部資金の獲得状況	F	外部資金は前年度比21%減と大幅に減少している。放医研の規模や研究内容から見て競争的資金の総額が少ないと思われる。
5．研究成果の普及・活用の促進	研究成果の普及の状況	A	ほぼ年度計画を達成している。特に、原著論文が1.3件/人と前年度(0.8件/人)を大きく上回ったことは高く評価される。
	研究成果の活用促進の状況	A	特許出願数が前年度2件に対して22件と計画を大きく上回ったことは評価できる。ただし、特許及び共同研究については、数だけでなくその質が重要であり、成果の社会への貢献や還元まで評価するには時間が必要である。
6．施設及び設備の共用	各種放射線照射装置の共用の状況	B	装置の共用を新しく開始するための体制整備の段階に留まっており、年度計画より遅れている。今後、積極的に外部利用を推進することが必要である。
7．研究者・技術者等の養成及び資質の向上	研究者・技術者の養成	A	ほぼ年度計画通り進んでいる。特に、外部からの若手研究者の受け入れ実績や研修業務の進展は高く評価される。
	研修業務	A	研修受講者数が大幅に増加しており、年度計画を十分達成している。研修件数・研修内容共に充実したものであり、放医研の社会的使命を十分果たしていると考えられる。
	研究交流	A	受け入れ研究者数が目標を上回る等、年度計画を十分達成している。
8．行政のために必要な業務	原子力災害対応等の実施状況	A	被ばく患者の受け入れ体制の維持、支援要員や資材の管理整備、原子力防災や被ばく医療に関する人材教育等、日本の被ばく医療の中心機関としての社会的使命を果たしている。特に、平成13年度においては、国立大蔵病院生育医療センターの被ばく事故(平成13年12月21日)での対応は高く評価される。

中期目標の項目	評価項目	部会による 4段階 評価	放医研部会としての所見
・業務運営の効率化等に関する事項			
1．業務運営の効率化	研究組織の体制及び 運営	A	新たな室の新設や幹部職員への民間からの採用等、独立行政法人制度の特長を活かした経営努力が認められる。ただし、それらが実際に業務運営の効率化につながっているかどうかは、初年度では評価が難しい。
	業務の役割分担の 明確化	A	独立行政法人制度の特長を活かした試みが積極的に行われている。ただし、それらが実際に業務運営の効率化につながっているかどうかは、初年度では評価が難しい。
	運営費交付金業務の効率化	B*	中期目標において設定した目標値である1%の効率化を達成している。 *文部科学省独立行政法人評価委員会業務運営評価ワーキンググループにより提案された3段階の評価区分に基づいて、「B」（1.0%以上1.5%未満の効率化）と評価している。
2．財務内容の改善	自己収入の増加	A	平成13年度の自己収入額（817百万円）は予定額（761百万円）を上回っている。
	固定的経費の節減	A	初年度は固定費の節減についての評価は困難である。来年以後は、前年度との比較により定量的な分析が可能になると思われる。
	重要財産の処分等の状況	-	平成13年度については、該当なし。
	剰余金の使用等の状況	-	平成13年度については、該当なし。
3．その他	施設、設備の整備状況	A	平成13年度の計画（生物実験棟設計及び第3研究棟非常電源設備等）は予定通り完了している。
	人員および人事に関する計画	A	若手研究者への任期制導入や民間からの採用等、人事の流動性を増すための経営努力が認められる。